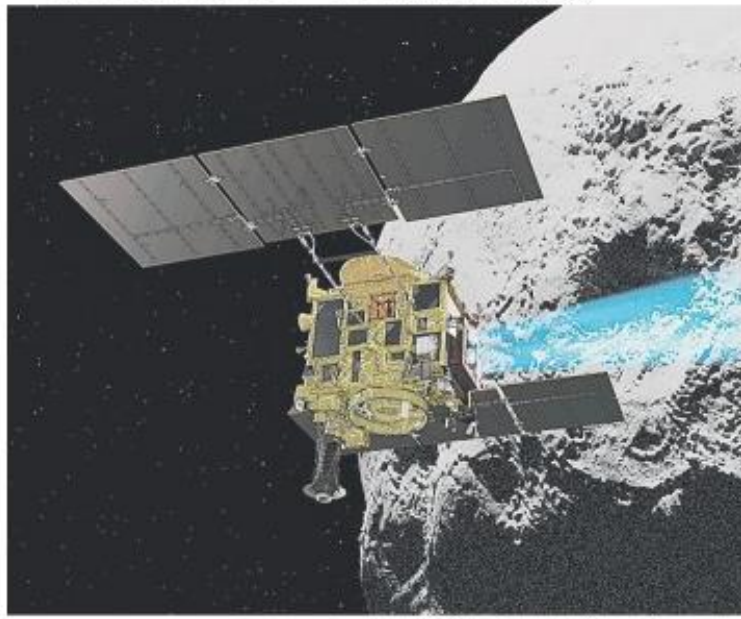


小惑星りゅうぐうを離れ、地球へ向かう探査機
はやぶさ2のイメージ図(JAXA提供)



はやぶさ2 再び小惑星へ

小惑星「りゅうぐう」での観測を終え、地球に向けて飛行を続ける探査機「はやぶさ2」について、宇宙航空研究開発機構(JAXA)の運用チームは9日までに、今年末ごろの地球帰還後、再び別の小惑星の接近観測に向かわせる方針を固めた。技術的条件や科学的な価値などを検討した上で、近く行き先となる天体を決める。

地球に接近、採取物分離後 「10年で到達」天体選定 JAXA

はやぶさ2は世界初となる人工クレーター作成などの任務を終え、昨年11月にりゅうぐうを出発。今年末ごろ地球に接近し、採取した砂を収めたカプセルを分離する。カプセルは地上で回収されるが、はやぶさ2は化学エンジンを噴射して離脱し、航行を続ける。

予定通り帰還できれば十分な燃料が残るため、運用チームは「挑戦的な運用技術を磨く貴重な機会になる」として、科学的な価値の高い運用を検討。木星付近まで到達可能なものの、観測機器や太陽電池の能力なども

考慮し、りゅうぐうと同じく地球―火星間にある小惑星への着陸を含む接近観測が最善と判断した。

運用チームは、地球から比較的近い小惑星など354天体を抽出。地球や金星の重力を使った軌道変更(スイングバイ)を使えば、最短で6年後に到達できる小惑星が複数あることが分かった。

また、金星でのスイングバイを2024年に行い、29年に到達できる小惑星も候補として検討している。金星接近時に赤外線カメラで撮影し、ほぼ同じカメラを持つ金星探査機「あかつき」の観測結果と比較することも期待できるとい

う。運用チームは、10年前後で到達可能な小惑星の中から選定を進め、新たな目的地として提案する。

運用チームの吉川真・ミッションマネジャーは「せっかく高価な探査機を打ち上げたのだから、より多くのデータを取りたい。探査機が長く機能するという技術的な実証にもなる」と意義を強調する。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

① 宇宙航空研究開発機構(JAXA)の運用チームは、「りゅうぐう」探査を終えて地球に向けて飛行中の探査機「はやぶさ2」を再び別の小惑星の接近観測に向かわせる方針を固めました。はやぶさ2が地球に接近したとき、りゅうぐうで採取した砂はどうするのでしょうか。

[]

名前 【 】

② はやぶさ2が予定通り帰還すれば十分な燃料が残る。その燃料を使って到達可能な太陽系の一番遠い惑星の名前を書きましょう。

[]

③ はやぶさ2が新たな目的地を目指す飛行で軌道変更(スイングバイ)を使います。それには何を利用しますか。

[]

④ はやぶさ2の再探査にはどのような意義があるのでしょうか。30字以内で書きましょう。
